

2021年7月18日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 牧之瀬俊彦

奏楽 鬼頭容子

前奏

招詞

ローマの信徒への手紙 第12章1節

讃美歌

讃美歌 21-13-1 (みつかいととともに)

交読

詩編 第71篇24節aまで (p. 76)

祈禱

聖書

マルコによる福音書 第14章32~42節

(新約 p. 92)

讃美歌

讃美歌 21-346-2 (強き聖霊よ)

説教

「心が燃える祈り」

この礼拝に与えられています聖書箇所最初に「ゲッセマネという所」とあります。このゲッセマネという名前は、わたしたちにとってどんな印象を与えるのでしょうか。この場所

の名前を掲げて、そこから語り始めるマルコによる福音書は、わたしたちにとって親しみのある言葉や出来事になっているでしょうか。マルコが望むように聞き取ることができるでしょうか。

ゲッセマネでイエスさまが弟子たちに促されたように、ここで私たちに出来ることは何か。それは眠らないことだ。ゲッセマネでのイエスさまのお姿、その祈りの言葉を聞きながら居眠りをするのは、とんでもないことだ。目を覚まし、祈りをもって、イエスさまのお姿をじっと見つめることが大切だ。それがまず正直な気持ちです。けれど、一方で弟子たちの困惑している姿は決して他人事ではありません。だとすれば、わたしたちも弟子たちと同じように困惑する思いの中に立つしかないのでしょうか。

33節、「イエスはひどく恐れてもだえ始め」とあります。イエスさまがもだえるとはいったい何を意味するのだろうか

か。ひどく恐れてとある。イエスさまともあろうお方が、おびえておられる。何にそんなにおびえられたのだろうか。イエスさまらしくないのではないか、というわたしたちの心の片隅の声が聞こえてきそうです。「ひどく恐れ」とは、元々はひとつの言葉で、わたしたちが理解できないような、途方もない存在にぶつかって恐れる、そういう思いだと説明する人もいます。激しい力を持っている存在の前に、立たされた時に味わうおびえのようなものです。「もだえる」という言葉を聞くと、わたしたちはどうしてもものたうちまわるような人の姿をイメージします。ただここで、イエスさまが、そんなふうにならされたのかどうかは分かりません。もしかすると、一見とても穏やかで静かな祈りであったかもしれません。「もだえる」とある言葉には、「民衆から切り離されている」という意味の言葉があるそうです。「人々から切り離されている」、「人々から捨てられている」と言うこともできます。しかも、そこに置かれている人の状況は簡単なものではありません。ひとりで、悠々とやっていけるというようなものではなく、不安がある、心配があ

る。ひとりではやっていけないという思いがあるのに、周りを見回しても誰も助けてくれない。ですからここでも、むしろ「不安を抱く」と訳している方が多いのです。

ここで自分を超越る大きな存在とは、言うまでもなく神さまのことです。その神の御前にあって、しかもこれから先、自分がどうなるか分からない。自分は、今全くの孤独の中に置かれているとすれば、当然心もだえるように悩みます。ただやはり、こう思います。イエスさまともあろうお方が、どうしてと言いたくなるのではないのでしょうか。もしかすると私たちは、今ここでのイエスさまのお姿は確かに痛ましいものではあるけれど、しばらく我慢していれば、やがて光が射しこんで来る。だからそれまでのことなのだから、辛いけれど、少しだけ耐えていればいい。イエスさまは神さまに決められた道筋を歩いておられるけれど、今しばらく苦しみの中におられるだけなのだ、そう考えてはいないのでしょうか。もしそうであれば、おそらくここでイエスさまが味わっておられる、このもだえ悩

む戦いの深さが、わたしたちにはもう分からなくなってしまう
と思います。古代の最初の教会が最も大切な信仰の告白として
言い表した言葉に、「イエス・キリストという方はまことの神で
ありまことの人である」があります。まことの人となられたと
いうことは、まことに悩まれたということです。

イエスさまは、死を前にしてまことに悩まれました。35
節、「少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この
苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り」とあります。「で
きることなら」、他に道はないのですかと、神さまに尋ねておら
れる。わたしは何のためにこの世に遣わされたのか。あなたの
愛を明らかに語り、また実現するためです。あなたが人を愛し
世界を愛するのに、わたしが死ぬ以外に方法はないのですか。
もう一度考えて欲しいと父なる神に問われました。もっとはっ
きり言えば、死にたくないと言われました。それは主イエスら
しくないことなのでしょうか。それともここにこそ、主イエス
のお姿がはっきりと現れていると、わたしたちは信じることが

できるのでしょうか。

この時、誰の助けも求められないような孤独の中にありましたが、33節には、「ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われた」とマルコは書いています。これまでもマルコ福音書は、この3名の弟子が立ち合った、大切な場面を記しています。ひとつは、会堂長ヤイロの娘が死にそうになり、イエスさまに助けを求めます。実際イエスさまがヤイロの家に着いた時には、もう娘は亡くなっていますが、娘の部屋にお入りになる時、この3人の弟子を伴って、3人の弟子たちだけの前で、この娘に「娘よ、起きなさい」と声をかけ、生き返らせておられます。もう一つは、やはりイエスさまがこの3人の弟子だけを連れて山の上におられた時、その衣が突然真っ白に輝いて天からの声が届きます。「これはわたしの愛する子」と。イエスさまはこの3人の弟子を証人として、一体ご自分が何者であるかということを通して神がお示しになりました。

ところで、このゲッセマネではイエスさまの衣が真っ白に輝いたわけではありません。いったいこのどこで、ふたつの出来事にも勝るような仕方で、ご自分が神の子であられること、まことの神であることの力を示されたのでしょうか。ここでも、3人の弟子たちに、証人として見ておいてもらいたいと考えておられたことは確かです。けれど、それはいったい何なのでしょう。

ひとつはっきりしていることは、「祈り」です。「目を覚まして祈っていなさい」、一緒に目を覚まして祈ってほしい、とイエスさまは願われました。祈るということは、諦めないということです。諦めないということは徹底的に神さまを信頼するということです。「アッバ、父よ」とイエスさまが呼びかけて祈られました。それほどに、信頼を込めて父なる神にすがることができる、それが既に、主イエス・キリストが神の子であられることのしるしでした。

イエスさまは弟子たちに目を覚まして祈っているように
言われましたが、弟子たちは、それができなかつた。どうして
でしょうか。ある人が面白いことを言いました。弟子たちは自
分を信じていたから眠れたのだらうと。面白い言い方です。つ
まり、神さまを中途半端にしか信じていない人間、どこかで自
分でもやれる、と思っている人間は、自分で言い訳をすること
ができると思っている。でも、本当に神さまを信じている人間
は、こういう時にこそ、目覚めているというのです。そうする
とここでわたしたちは、どうしても認めなくてはいけないこと
がある。それは、わたしたちは、本当には祈れない人間でさえ
あるのだということ。わたしたちはいつも教えられます。祈る
ことを。そうだと思って、自分の家に帰って祈ろうとします。
祈れません。心が集中しません。すぐに飽きて来る。疲れてき
ます。聖書を読んでいると眠くなります。イエスさまのように
目覚めて祈ることができない。そうすると、この世にあって、
真実に祈ることがおできになったお方は、神の子、神ご自身で
ある主イエス・キリストだけでした。このことも、わたしたち

ははっきりと認めなければならぬと思います。

もう一つ心に留めておきたいことがあります。イエスさまはここで、「心は燃えても、肉体は弱い」と言われました。この「心は燃える」という言葉には、情熱という意味の言葉もありますが、もう一つ大事なことがあります。聖書協会共同訳で「心がはやっている」と訳したように、むしろ心が前のめりになっている、命令を待っている、神さまからのお声がかかるのを待っている。ですから、「心が喜んで備えている」という訳になる。心が喜んで準備している。今か今かと備えている。ところが肉体は弱い。だからそのための備えが崩れていく。

そうするとここでイエスさまは、祈りの中で、その備えを作られたこととなります。神さま、他に道はありませんかと尋ねながら、その祈りの戦いの中で、神さまのみこころはこれしかないということがはっきりした時、そこにすべてを傾けて従うという心を、ここで言い表されました。「アッバ、父よ、あ

あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかしわたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」。これは諦めではありません。神さまがそうおっしゃるのなら仕方がない、ではありません。神さまがそのようにお命じになるならば、喜んでそこへ赴きますと言われた。そして、イエスさまはここで立ち上がられました。弟子たちが目を覚ますことができなかつたのは、自分自身を信じていたからだということを申しましたが、そこでもわたしたちの罪の姿が現れます。どうしてかと言うと、わたしたちが祈れないこと、目を覚ますことができないこと、みこころに従えないことは、ただ何か努力が足りないということではないからです。わたしたちは弱いと言えればいい訳が立つと思つているところがあります。けれど、イエスさまこそそこでも、神のさばきの厳しさをはっきり受けとめられて、前へと進み始める。「時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た」。「わたしを裏切る者」というのは、「わたしを渡す者」という言葉です。わたしを敵の手に渡

してしまう者が来た。渡されるために、わたしは今行くと言われ、遂に十字架の死に至る道に踏み込んで行かれます。

35 節に、「少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り」とありますが、元の文はただ、「この時」としかありません。これは<決定的な時>という意味です。ただの苦しみの時という意味ではない。苦しみもある。けれど、その苦しみの中で、死が現実になり、その死において救いが明らかになる時でもあります。ですから、「この時」とは、ただ一人の人が、十字架の上で苦しむということよりも、神さまがみわざをなさる、その時が来ているということです。けれど、それがご自分にとって耐え難い苦しみであるならば、自分から過ぎ去ってほしい、自分のところに来ないで遠のいてほしいと、イエスさまが求められた。けれど、神はそれをお許しにならなかった。そしてその道を歩む主イエスを見守り、その主イエスを受け入れられました。

この夏、半田教会は二年ぶりに夏期伝道実習生を迎えます。この時期ですから、お互いの安全を確保するためにはどうしたらいいのか。先日の役員会でもいろいろな意見が出され、それをもとに神学校に申し入れ、準備を進めています。わたしも横山も神学生の時、二年続けて夏期伝道実習を約40日間教会に寝泊まりして実習させていただきました。教会での実習は今も昔も同じですが、牧師の大切な務めを学ぶひとつとして、教会員の訪問、病気の方のお見舞いがありました。特に、もう治る見込みの少ない病人の方を尋ねること、死を避けるわけにはいかない人に慰めを語るという務めがあります。実際わたしは、二度目の実習の最後の日曜日、一人の隠退教師の葬儀式が教会で行われるという経験させていただきました。もともとわたしが献身する思いが与えられたきっかけは、勤務先の病院で亡くなる人を前にして何ができるのか、という疑問からでした。仕事柄、聖書のことを伝える困難さがありましたが、イエス・キリストのことを知ってもらえたら、キリストの方を向いてほしいという願いがありました。けれど、自分には何ができ

るのか。そんな自分が、主イエスを指し示すとはいったいどう
いうことなのか。途方に暮れるような思いで考えさせられまし
た。牧師になったからといって、それは変わりません。自分は
いったい何をしに行くのかという問いがいつもあります。そし
てこう考えます。イエスさまご自身は、罪の道に赴こうとする
人に対しては、立ち塞がるようにして、その道を遮断し、死の
床に就く娘を甦らせてくださったイエスさまだ。けれど、その
イエスさまは、自ら殺される。はっきりと死に向かわれる。そ
してそれを神さまがよしとなさった。そして、その死に赴いた
主イエスを、父なる神が受け入れておられる。でもそこでお終
いではない。そこから甦りの道が始まる。主イエスが、真実に
十字架で死なれたからこそ、まことの甦りが、そこに父なる神
によって用意されていたのだということです。

イエスさまは「心が燃えても」と言われました。誰が側
にいても、眠り込んでしまうような人間の罪があらわになると
ころで、イエスさまだけがひとり目覚めて、祈り続けられまし

た。それは、人間は、ただ苦しむだけ苦しんで、それでも最後まで生きて行かれるものではなくて、祈りながら開いてくださった道があるからだ。これは決定的なことで、そうでなければ、わたしたちがこの地上にあって、最後まで望みを抱いて生きる道は開かれなかったのです。その主イエスの祈りの姿、それを通してわたしたちは、主がどれほど深くわたしたちを愛し、わたしたちが生きている世界を愛されたのか、そのことに深く心を留めて新しい1週間を歩み始めます。祈ります。

教会のかしらである主イエス・キリストの父なる神さ

ま、わたしたちのために、眠りこけてしまうわたしたちでありながら、あなたが独り子をこの世界にお遣わしになり、みこころに従って、戦いに赴かせてくださったみこころを、わたしたちも目覚めて知ることができますように。教会が、目覚めて祈り続けることができますように。みこころに従うことができますように。いつも私たちの心が燃え、みこころならば、あなたの指し示すところへと出て行く備えの姿勢を作ることができる

